

本保 與吉（ほんぼ・よきち）

1、プロフィール

歌人。昭和2年「霸王樹」に入会。その後、「ポトナム」「花実」「原始林」を経てのち「日本歌人」に入会。前川佐美雄に師事し、「時空における自我」の確立を追求した。

<生没>

1906(明治 39)年5月 16 日～2000(平成 12)年 10 月 10 日

<代表作>

『北限禾本』『黄昏漏刻』『月下の籟』『地に風そばへ』

<青森との関わり>

札幌市生まれ。昭和 45 年6月八戸市に移住。翌年地域の短歌普及活動として清遠短歌会を結成主宰する。

2、作家解説

昭和2年「霸王樹」に入会。その後「ポトナム」「花実」「原始林」の各同人を経て、昭和 44 年に「日本歌人」に入会し、前川佐美雄に師事した。以来同会の有力な同人、選者として活躍した。

第1歌集『北限禾本』は、作者の戦前、戦後の三十余年にわたる半生の作品であり一個の生活者として現実の人生や社会を忌憚なく見つめ、零細農、小作紛議、婦女売買等幅ひろく作った。特に集中「霧笛」一連の作品は、綴方連盟事件の拘留の歌で、作者の作品を鑑賞する上で、最も重要視すべき歌である。

昭和 45 年に八戸に移住し、翌年に地域の短歌普及活動として、清遠短歌会を結成し主宰する。以後青森県、八戸の短歌の発展と普及に尽力し、青森県芸術文化振興功労賞、八戸市文化賞を受賞した。

與吉の歌は、内面の表出や、その技法、外部の着眼設定に独特なものがあり、「日本歌人」に入会してからは、前川佐美雄の「時空における自我」の確立、すなわち固有の個をさぐり、その中に宇宙を見い出すことに固執している。

3、資料紹介

○『北限禾本』（ほくげんかほん）

図書

1963（昭和 38）年3月1日

190mm × 135mm

昭和2年から37年までの35年間にわたる作品から608首を厳選し収めた第1歌集。仙人掌集、白揚集、風塵集、樹海集に分かれ、山田義夫画伯の見返しの水墨画、山下秀之助の「序文」、著者のあとがきを掲載している。